
 学 会 記 事

第24回リバーカンファレンス総会

日 時 平成12年7月1日(土)
9時30分より
会 場 日本歯科大学新潟歯学部
講堂

I. 一 般 演 題

1) 消化器疾患を契機に HIV の感染が判明した3例

高橋 光・関根 忠一
天海 陽子・小柳 佳成
原澤 茂 (済生会川口総合病院)

【初めに】消化器疾患を契機に HIV の感染が判明した3例を経験した。【症例1】49歳, 男性. 不特定多数の性交渉歴有り. 既往歴に B 型急性肝炎, 梅毒がある. 発熱, 右上腹部痛にて入院. HIV-1 陽性, CD4 cell ; 260/ μ l. 肝 S5 に肝膿瘍が疑われる径約 6 cm の腫瘤を認めた. 赤痢アメーバ抗体の上昇を認め, 赤痢アメーバ性肝膿瘍と診断した。【症例2】31歳, 男性. 不特定多数の性交渉歴有り. 食欲不振, 黄疸, 肝機能障害にて入院. HIV-1 陽性, CD4 cell ; 408/ μ l. A 型急性肝炎と診断し保存的治療で軽快した。【症例3】46歳, 男性. 同性愛者. 既往歴に梅毒がある. 腹痛, 血性下痢にて入院. HIV-1 陽性, CD4 cell ; 59/ μ l. 大腸に潰瘍, びらんを認めた. 赤痢アメーバ抗体の上昇を認め, 赤痢アメーバ性腸炎と診断した。【結語】赤痢アメーバ性腸炎, 肝膿瘍は HIV 感染者で散見される病態であり, HIV 感染の可能性も考慮に対応することが必要と思われる。

2) 慢性肝疾患を合併した血友病患者の予後

畑 耕治郎・黒田 兼
五十嵐健太郎・何 汝朝 (新潟市民病院)
月岡 恵 (消化器科)
真田 雅好 (同血液科)

血友病患者66例について肝機能, 肝炎ウイルスマーカー, 臨床経過および予後を検討した. 肝機能異常は34例(65.4%)にみられた. HBs 抗体は22例/30例(73.3%), HCV 抗体は27例/27例(100%)が陽性と高率であった. HCV-RNA は13例/16例(81.3%)が陽性で, ジェノタイプは12例について測定し1b6例, 2a4例, 2b2例であった. HCV 抗体陽性肝機能異常者は19例/27例に認められ, 肝硬変進展例は6例(非代償性4例)であった. 3例に食道・胃静脈瘤破裂を認め, うち2例は HIV 陽性であったが臨床経過は肝病変が優位で, 免疫不全症よりも肝不全が直接死因となった. また1例に肝細胞癌が発生し TAE が奏効したが, 肝硬変の進行に伴う血小板減少による急性硬膜下血腫が死因となった. HIV・HCV 重感染例では比較的若年で肝硬変へと進展し, 肝病変が臨床経過および生命予後に影響を与えた。

3) 急激な経過で発症し腹部 CT で急性脂肪肝様の所見を呈した糖尿病性ケトアシドーシスの一例

細葉美穂子・田中 敏春
木下 秀則・広瀬 保夫 (新潟市民病院)
畑 耕治郎・山崎 芳彦 (救命救急センター)
百都 健 (同内分泌代謝科)

症例は42歳女性. 平成12年3月初旬より感冒様症状が出現. 中旬より, 口渇を自覚し飲水が多量になっていた. その後, 嘔吐, 上腹部痛が出現したが, 近医で胃腸炎と診断されていた. 3月20日早朝より傾眠傾向となり, 21日深夜, 意識障害で近医に搬送されたが, 著しい高血糖のため当院に紹介搬送された. 来院時, 著明な代謝性アシドーシス, 血糖 785 mg/dl と高血糖, 肝機能障害, 横紋筋融解症, DIC, 急性腎不全を認めた. また, 腹部造影 CT では肝臓全体にびまん性に低吸収域を呈しており, 急性脂肪肝の所見であった. 第3病日の腹部 CT では脂肪肝は著明に改善していたが, 肝生検では, 小葉内にびまん性の中～小脂肪滴の高度沈着を認めた. 糖尿病性ケトアシドーシスの治療により全身状態は良好となり, 種々の病態も速やかに改善した. 急性発症の1型糖

尿病に、急性脂肪肝を始めとした多種多様の病態を呈した症例であるが、臨床報告例も少なく興味深いため報告した。

4) 血球貪食症候群の肝機能に関する検討

阿部 裕樹・渡辺 徹
上原由美子・吉川 秀人
坂野 忠司・阿部 時也 (新潟市民病院)
小田 良彦 (小児科)
畑 耕治郎 (同 消化器科)

血球貪食症候群は、感染症、悪性腫瘍などに合併し、神経症状、血球減少、凝固能障害、肝機能障害などの多彩な症状を示す。今回我々は、当科で経験した血球貪食症候群の10例について肝機能障害を中心に検討したので報告する。

10例の基礎疾患は、ウイルス関連性血球貪食症候群が6例、悪性腫瘍関連性血球貪食症候群が1例、原因不明が3例であった。

これらの10例は、いずれも GOT 優位の肝トランスアミナーゼの上昇を認めた。肝機能障害の程度は背景疾患により様々であった。また肝機能障害の強い症例では、血清フェリチンが高値である傾向が認められた。

血球貪食症候群では、血清フェリチンは網内系細胞の活性化を反映すると考えられており、今回の検討で、網内系細胞が強く活性化されている症例では、強い肝機能障害が起こる可能性が示唆されると考えられた。

5) 肝組織像の改善を確認しえたウイルス関連血球貪食症候群の一例

阿部 行宏・畑 耕治郎
黒田 兼・五十嵐健太郎 (新潟市民病院)
何 汝朝・月岡 恵 (消化器科)

症例は30歳男性。平成12年2月7日より発熱、悪寒が出現。2月12日より食欲不振となり、2月14日当院を受診し、この時インフルエンザが疑われ内服投与を開始した。しかし症状は改善せず2月21日肝機能障害が認められ、同日入院した。2月22日骨髓検査にて血球貪食像を認め、さらに EBV-VCA-IgM が陽性であり、EBウイルス起因の VAHS と診断した。さらに肝生検にて高度のリンパ球浸潤、CD68陽性細胞の増生、グリソン鞘中心の肉芽腫形成が認められた。その後、無治療にて徐々に軽快し、3月21日再度肝生検を施行した。一部肉芽腫形成残存しているが、リンパ球浸潤の軽減が認め

られた。症状、臨床検査所見も改善し、3月29日退院した。

本例の経過は Self Limited であり EB ウイルス感染による反応性の VAHS であったと考えられる。

6) Hepatic glomerulosclerosis を合併した肝外性門脈閉塞症の1例

渡辺 徹 (新潟市民病院)
小児科
新田 幸壽 (同 小児外科)
畑 耕治郎 (同 消化器科)

【はじめに】肝外性門脈閉塞症に腎病変を合併した1例を経験した。

【症例】13才の女兒。7才時に肝外性門脈閉塞症の診断で、食道離断・摘脾・胃血管結紮術施行。今回、発熱、下痢、意識障害、全身浮腫のため当科入院。昏睡、全身浮腫、腹水を認めた。検査所見では、低蛋白血症、血尿・蛋白尿、アンモニアの上昇、ICG クリアランスの低下を認めた。便培養より緑膿菌が検出され、大腸炎、portal-systemic encephalopathy と診断した。抗生剤、利尿剤投与で改善したが、血尿・蛋白尿が持続するため、腎生検を施行し、Hepatic glomerulosclerosis と診断した。その後 ICG クリアランスの改善に伴い、尿所見は正常化した。

【まとめ】ICG クリアランスの改善に伴い尿所見が正常化したことから、本症例の腎障害は感染に伴う一過性の免疫複合体の増加・処理機能の低下により生じたものと思われた。

7) 当院における B 型劇症肝炎の検討

黒田 兼・畑 耕治郎
五十嵐健太郎・何 汝朝 (新潟市民病院)
月岡 恵 (消化器科)

1981年から99年まで当院に入院した B 型劇症肝炎9例について検討した。男性5例、女性4例、年齢17歳から75歳。初感染5例、キャリア発症4例。入院時、死亡例群で GPT、T-Bil が高く、PT が低下、Cr、BUN の上昇を認め、また血小板数も低下していた。ウイルスマーカーは初感染例でも入院時すでに HBe 抗原抗体がセロコンバージョンしていた。preC 領域 W/M 比は、初感染死亡例で80から100%が変異株であった。全例に血症交換が行われ、ステロイドは死亡例は全例に